

""人間さま""

SA 泉州 田中 孝介

白いボールが、私達の遊んでいる頭上を飛び越して行った。いつもは三、四個なのに、今朝は二個だけしか飛んで来ない。「ははん、下手くそなやつがいて、打ち損じのチョロか?」と仲間の A 助が冷やかす。「それだったら、また球が飛んでくるはずなのに、今日はもう人間二人だけでやって来るぞ」と B 太がいぶかしがる。

しばらくすると、青い目のオーストラリア人と黒い髪の日本人とがこちらにやって来る。

「いつもだったら、この時間帯は日本人のゴルフツアー組で混んでいるのに、今日は彼らはまだ来ていないようで、ゆっくりプレーできますよ」とオーストラリア人。そんなに日本人が多いのですか? それにしても動物王国とは言え、こんなに可愛いワラビー達をゴルフ場で見られるなんて楽しいですね」と二人はこんな会話を交わしながら、セカンドショットをして、グリーン方向に歩いて行った。A 助と B 太は二人に好感を抱いたので、その後について行くことにした。

「ところで、こんなにワラビーたちが多いと、ときにはボールが彼らに当たることもあるでしょうね」と日本人。「そうなんですよ、我々もできるだけ彼らに迷惑をかけないようにと思って、巣箱や餌を林の中に置いているのですが、彼らも人間と同じようにいろいろな所で、遊びたいのでしょうな。」

「我々人間は健康のためとか、社交のためとかでゴルフをしています、結構ほかの生き物達に迷惑をかけていますね。」こんな会話を聞きながら、A 助と B 太はつい先日のことを思い出した。それは仲間の一人にボールが当たり、しばらく動けずにうずくまっているところへ、日本人達がやってきて、それぞれに曰く。

「かわいそうなことしたなあ! 勘弁してくれよ」と最初の一人が。「あっちの林の中なら安全だから、そっちで遊べば」と次が言う。

「ボールが飛んでくるフェアウエーにわざわざ来なくても」と三人目が。「こんなに沢山ワラビーがいれば、一匹や二匹どうってことはないだろう」と最後の一人が言い残して彼らは去っていった。「なにも日本人に限ったことでなく、世界中の人間様がこんな風だから、戦争や紛争が絶えることがないのだなあー、人間って本当に馬鹿な動物だよなあ」と、その時私達は彼等をあざ笑ったものだ。

現実に戻った私達は途中から二人のプレーヤーに別れを告げて、仲間たちのいる所へ引き返して行った。
